

聖書：ローマ 9：6～13

説教題：イスラエルの中のイスラエル

日時：2016年1月17日（朝拝）

ローマ書9章に入って「イスラエルの問題」が扱われています。パウロが伝えている神の福音は旧約聖書を土台としています。旧約の歴史を見れば明らかなように、救いのメッセージはまずイスラエルに語られました。ところが新約時代に入って多くのユダヤ人が福音を受け入れず、キリスト教会に連なっていません。4～5節で見たように、彼らは歴史の中で様々な特権を受けて来ましたが、そのクライマックスであるキリストが与えられると拒絶してしまいました。このことをどう考えたら良いのか。神がこれまで導いて来られたことは全部無駄になったのか。ユダヤ人は救われないのか。彼らへの約束は無効になったのか。また彼らが恵みから落ちるとすれば、今福音を信じている私たちも、やがて彼らのように救いから落ちることがあるということになるのか。

これに対してパウロは6節で「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。」と言います。ではユダヤ人の不信仰はどう説明されるのでしょうか。パウロの答えは6節後半に出て来ます。それは「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではない」ということです。イスラエル民族に生まれたからと言って、皆が本当の意味のイスラエルではない。すなわちイスラエルの中に本当のイスラエルが存在する。そして神の約束はあくまでもその真のイスラエルに対して成就されるということです。この考え方はすでにこの手紙の2章28～29節でも述べられていました。「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。」

パウロはそのことを旧約聖書の実例に訴えて証明して行きます。まず最初の例はアブラハムの子どもたちについてです。アブラハムはイスラエルの祖となった人です。その彼から生まれた人が皆イスラエルなのではない。そのことがイサクとイシュマエルを通して示されて行きます。7節：「アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです。」ここで引用されている言葉は創世記21章12節に出てくる主なる神

の言葉です。ご存知の通り、アブラハムは子孫の約束を与えられながら、なかなか子どもが与えられませんでした。そこで女奴隷ハガルを通してイシュマエルをもうけました。しかしその後で奇跡的な導きにより、妻サラを通して待望の男の子イサクを授かりました。その後のことです。イシュマエルはイサクをたびたびからかい、いじめるため、サラはハガルとその子イシュマエルを追い出すようにとアブラハムに迫ります。アブラハムにとっては厳しい要求でした。どちらもかわいい自分の子です。そこで悩んでいたある日、主がアブラハムに妻サラの言うことを聞け！と仰われます。その際に、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれるからだ」と仰せられたのです。主はこの言葉によって彼に2人の子どもの間にある重大な区別を思い起こさせています。すなわちイサクこそ神が約束したもう霊的なイスラエル、まことの子孫であるということです。8節にある通り、イシュマエルはアブラハムにとって肉の子どもではありますが。しかし肉の子どもがそのまま神の子どもではない。約束の子どもがまことの子孫、真のイスラエルなのです。9節：「約束のみことばはこうです。『私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。』」これはイサクが誕生する前の年、アブラハムが99歳の時に与えられた言葉です。主の使いはアブラハムに「来年、あなたには子どもが与えられている」と告げました。サラはこの言葉を聞いて笑ってしまいました。あまりにも信じがたい言葉だったからです。イシュマエルは一般的な方法で生まれた肉の子どもですが、イサクはこのように人間には全く考えられない仕方で、ただ神の約束によって誕生した子どもです。ですからこのイサクこそ、神が約束を与えたもうまことのイスラエルだったのです。このようにイスラエルの歴史の最初の出来事を考えてみても、イスラエルから出る者がみなイスラエルなのではないという事実を確認することができます。民族的イスラエルの中に霊的イスラエルがあるのです。その后者に神の約束は与えられて来たのであり、その者たちに神の約束は真実に成就して来たのです。神の御言葉が無効になったわけではないのです。

パウロはもう一つの実例を取り上げます。今度はその次の世代のイサクとリベカの子どもたちに関することです。先の例ではイサクとイシュマエルはアブラハムの子どもという点では同じですが、それぞれの母が違いました。そこに着目すれば、イサクは正妻から生まれたから祝福され、イシュマエルはそばめから生まれたから祝福されないのだと考えることができます。そして正妻から生まれた子がまことのイスラエルなのだと言いたくなるかもしれません。しかし二つ目の実例において、

エサウとヤコブはどちらもイサクの正妻リベカから生まれました。彼らの場合は父も同じですし、母も同じです。さらに双子ですから生まれた時まで同じです。条件は何もかも一緒です。ところがその双子の間にまことのイスラエルとそうでない者との区別があった！

この二人について神はどんなことを言われたのでしょうか。12 節に「兄は弟に仕える」という主の言葉が出て来ます。すなわち弟の方が兄に勝る。これは何を言っているのでしょうか。どちらも祝福を受けるが、弟の方がやや多くの祝福を受けるという意味でしょうか。しかしこのローマ書の文脈から考えると、これは片方がまことのイスラエルであり、片方がそうではないということを行っているのでなければ意味がありません。そして 1~5 節からの流れを考慮すれば、これは一方は救いにあずかる者となるという意味で片方にまさっており、もう一方は救いにあずからないという意味で片方に劣るという意味であることとなります。このような彼らの永遠の運命に関わる主の言葉はいつ語られたのでしょうか。創世記 25 章 23 節を見ると分かりますように、それはリベカが二人を出産する前でした。ですからこの二人が「まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに」でした。神は二人が生まれ出て、それぞれの性格や行動を見てから、どちらをまことのイスラエルとするかを決めたわけではありませんでした。神の選びは人間の行ないにはよらず、ただ召してください方、すなわち神ご自身によってなされたのです。

それにしても神はなぜ弟ヤコブを選ばれたのでしょうか。聖書にはこのような記事がよく出て来ます。たいてい兄が退けられて、弟が祝福される。私は長男で、下に弟がいますので、昔はこういう聖書の話が嫌でした。しかしこれは私たちに大切なメッセージを語っているものです。私たちは今、イスラエルから出る者がみなイスラエルなのではないということを見えています。すなわち自分はイスラエル人であるという外面的なことにより頼むことはできない。それと同じです。自分は兄だからということで、それだけで神の前に何か優れている者であるかのように考えることはできない。神の前ではそれは少しも誇るに値しない。確かに自分は兄貴だと威張っても、実際は他の兄弟より時間的に少し先に生まれたというだけのことです。それだけで偉いというのはおかしい。ですからそのような誤ったところによりかかるのではなく、真により頼むべきお方により頼め！と私の目を正しい方向に向けさせてくれたという点で、このような聖書のメッセージは実は私の大きな助けとなった

のです。人間的な誇りや、家柄や、生まれた順番などに間違って土台を置かないように、むしろ頼るべきお方に目を注いで、その方に頼るようにと私たちを導いてくれるという点で、実はこれらは私たちを祝福へ導く神のメッセージなのです。

最後の13節ではマラキ書1章2～3節から引用されていますが、これはさらにこのメッセージを徹底しようとするものです。12節の「兄は弟に仕える」という言葉は、単に神が将来を予見された言葉として読むこともできますが、13節の言葉では明らかに神が主権的に関わっています。神がヤコブを愛し、エサウを憎んだのです。もちろん「憎む」という表現がされていると言っても、神は罪とは関係のない聖なるお方ですから、私たち罪人が「憎む」時と同じイメージで考えてはなりません。ポイントはこれも神の選びを表すための一表現であるということです。「ヤコブを愛する」という表現で、神は彼をご自身の約束を受けるまことのイスラエル人としたということを言っている。一方の「エサウを憎んだ」という表現で、神は彼を民族的イスラエルには属するが約束の子どもという範疇には入らない者として、すなわち肉の子どもではあるが神の子どもではない者としたことを言っているのです。

以上、今日の箇所でパウロが述べて来たことは、神の約束はすべてのイスラエルと結ばれたのではなく、イスラエルの中のイスラエルと結ばれたということです。これはパウロが考えたことではなく、旧約聖書自体に示されて来たことです。約束はアブラハムのすべての子どもとではなく、イサクと結ばれました。またエサウとヤコブの兄弟について言えば、ヤコブだけがその対象として選び分けられました。このことを踏まえれば、神の約束は真のイスラエルには成就していることが分かります。ですから神の御言葉は無効にはなっていないのです。神はやはり信頼できる方、その御言葉は真実、その約束は永遠に有効なのです。

しかし私たちが気になるのは、では私はどうなのかということではないでしょうか。今日の説教題は「イスラエルの中のイスラエル」としましたが、私はどうなのか。私は目に見える教会の教会員であるが、神の約束が真に成就するまことの教会員、まことの神の民なのか。そしてこれは今日の御言葉に従って突き詰めれば、私は神によって救いに選ばれている者なのかどうかということになります。

結論から言えば、私たちは自分が神に選ばれているかどうかを前もって知ることはできません。それを知ることができる方法はただ一つ、私がキリストを信じ、この方に従う歩みをすることです。また種まきのたとえなどから分かりますように、最後まで続く信仰でなければ本物とは言えません。一時的な、見せかけだけの信仰というものはあり得ます。それに対して神の選びは必ず終わりまでの信仰の生涯に結実します。今日の箇所に出て来たイサクやヤコブもそうです。彼らの生涯には色々なことがありましたが、彼らは最後まで主を信じ、主に従う信仰の道を歩み通しました。そこに神の選びが実となって現れているのです。

ですから私たちはこのように考えることができます。まずもし私がキリストを信じ、告白して生きているなら、それは神の選びによるということです。私の信仰は単なる私の人間的決心から始まったものではなく、聖書によれば、私が生まれる前からの神の永遠の選びの計画に基づいている。神が私を救いへ召してくださったから、今日の私の信仰の歩みがこのようにあるということです。私たちはこのことを受け止めて、感謝したいと思います、そしてもしこの信仰が神から始まったなら、それは必ず最後まで行きます。私たちはこのことに勇気づけられて神に望みを置き、神の力によって最後まで歩み通す信仰の生涯へと進めば良い。

まだキリストを信じていない人についてはどう考えたら良いでしょうか。まだ信仰告白には至っていないものの、この礼拝に集っている方であるなら、その方は神の大きな導きの下にあると考えることができます。ヨハネ6章44節:「わたしを遣わした父が引き寄せられない限り、だれもわたしのところに来ることはできません。」ですから今このようにキリストを礼拝する場にあるということ自体、それは自分の考えをはるかに超えた神の大きな導きの下にあるということを暗示しています。その神の導きを感謝して、益々キリストを信じる歩みへ進んで行けば良い。

ここには集っていない教会外の人々についてはどうでしょうか。私たちは自分の家族や友人を思い浮かべるかもしれませんが、その方々については今の時点で結論を下すことはできません。最後までどうなるか分かりません。ですから私たちは福音を伝えるわざに励まなくてはならないのです。神に選ばれた人はキリストを信じます。そしてキリストを信じるためにはどうしても御言葉に触れることが必要です。10章14節:「聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。」で

すから私たちは福音を伝えるのです。そのことを通して神の導きが現れるのです。

以上、今日は神の約束はイスラエルの中のイスラエルに成就することを見ました。今の新約時代には神が遣わしてくださったキリストに信頼する人に成就します。私たちは神の御言葉は決して無効にはならないことを賛美しつつ、自らを吟味したいと思います。表面的にキリストにつながっていることで満足するのではなく、益々キリストに信頼し、この方に従う歩みをする者であるように。そして、この信仰は神の一方的な選びによることを畏れつつ感謝し、いよいよ神に希望を置いて、約束が最終的に成就するやがての栄光に向かう歩みを、確信を持ちつつ、御名を益々賛美しつつ踏み進んで行きたいと思えます。